

那珂川町図書館

オススメの1冊

『深い穴に落ちてしまった』

イバン・レピラ／著 白川貴子／訳 東京創元社 【963 比°】

物語は何らかの理由で深い穴の中へと落ちてしまったところからはじまる。この本に出てくる主な登場人物は二人。「大きな兄」と「小さな弟」だ。この兄弟、作中では「兄」と「弟」とだけ表記され、年齢も記されていない。

深い穴に落ちてしまい、出られなくなった兄と弟は何とかして穴の外に出ようと試行錯誤する。しかし穴は入口からピラミッド状になっており、よじ登ろうにも登れず、土で階段を作ろうと体重に耐えられず崩れ、到底外には出られそうもない。二人で声を張り上げて助けを呼んでみても、誰も来る気配すらない。正直、はじめはこの物語の世界観をうまくつかめず、途中まで読んだだけでは意味の分からない不気味な話に見えてしまうかもしれない。だがぜひとも、途中で投げ出すことなく最後まで読んでほしい。きっと最後には、あなたの中にも何かが残る、そんな作品である。

誰の助けも得られない中、二人は生き残るために穴の中でみつけれられるわずかな食料で命をつないでゆく。土を掘って湧き出た泥の味がする水を飲み、木の根や虫などで腹を充たす。物語の冒頭で「母さんの袋」には食料が入っていることが記されているが、兄は「あれに入っているのは、母さんに渡す食いものだ」と言ってそれに頼ろうとする弟を叱りつけた。ここだけ見ると、家か、あるいはどこか別の場所で待つ母親へと届けるために持ってきた食料であり、それに手を付けるわけにはいかないという意味にも取れるのだが、果たして。その理由は、最後まで読んでいただければわかることだろう。

また、この本には様々な謎が存在する。先述したように、兄弟の名前や年齢が明かされないのはなぜなのか。素数のみで振り分けられた章番号の意味とは。著者がこの本に込めたメッセージを、様々な仕掛けから読み解いてみるのも面白いかもしれない。

鬱屈とした穴の中での生活。その中で日々溜まっていくストレスと飢餓感により壊れていく弟と、そんな弟を決して見捨てることなく守り続ける兄。

兄弟は果たして無事に穴の中から出られるのか。仮に出られたとして、そこに待つ結末とは。これは暗黒時代を生きる「寓意と暗喩に満ちた大人の童話」である。